高岡市立博物館　1999.5号

博物館だより

地　獄　図　　紙本著色　二幅対　縦横 178.0×96.5

現世で悪行をしたものが死後おくられる空想の世界。生前の罪状が閻魔王を中心に十人からなる裁判官により審判され、それぞれの罪状にしたがい鬼達により罪人を苛責するところである。八大地獄はじめ八寒地獄など百三十六の種類がある。〔千光寺蔵〕

高岡銅器問屋の移り変わり

講師　定塚　武敏　先生

1.高岡銅器と問屋の働き

高岡銅器産業における問屋の働きは大きい。問屋というのは、個々の生産者から品物を集め、これを直接販売するのでなく、小売商店やデパートへ卸すという流通の中間的な存在である。このような問屋を持っている伝統工芸産業は多くない。例えば、井波の木彫刻や輪島の漆器でも、作っている人たちの組合はあるが、問屋というものはなかった。問屋が有るのと無いのとでどこが違っているかというと、産業の規模の大きさが違い、約10倍ほどの差がある。高岡銅器より有名なくらいの南部鉄器でさえ、高岡銅器の産額からみると10分の1もない。やはり、問屋がきちんと組織されていたかどうかで違ってきた。

高岡という町は、今は観光にも力を入れているが、本来は工業都市なのである。昭和60年代までは、高岡の工業出荷額は8,300億円程で、もちろん、富山県では随一、日本海沿岸でも北九州市に次いで多い。その中でも金属産業が大部分で、アルミと銅器を合わせると5,000億円を越えている。その多くはアルミ産業だが、このアルミ産業は実は高岡銅器から出てきたものである。第二次世界大戦に入ってから銅が戦時物資となり、使えなくなってしまい、その代替としてアルミを使い始めた。しかし、戦争が激化するにつれ、アルミ会社もほとんど活動できず名目だけとなった。ところが、終戦を迎え空襲を免れた高岡には、鋳造設備が無傷で残ったので、転廃業や兵役から復帰した鋳物業者が、この設備と伝統の鋳造技術を駆使して、まず生活用品の製造に乗り出した。原料は主としてアルミニウムで高岡のアルミ産業がどんどん発展していった。したがって、アルミ産業も銅器産業の一つの分岐化したものといえる。ただ最近は高岡銅器というと、芸術性のあるものや、美術的・工芸的な価値の高いものだけが銅器だと思っている面があるが、昭和30年代までは、火鉢・花瓶や瓶掛など実用的なものもたくさん作っていた。とにかく、高岡の町は江戸時代から問屋ができていたので、大きな産業として発達してきた。

2.高岡銅器の始まり

高岡の鋳物産業は、創町期の江戸時代の初めに、加賀二代藩主前田利長によって招かれた鋳物師達（現戸出西部金屋）によって始められた。最初は7人の鋳物師が招かれたが、後から4人加わり、全部で11人の鋳物師が鋳物業を営んだ。当初は銑鉄製品が主で、家庭用品の鍋や釜、あるいは農機具の鋤・鍬などであった。そして、この11人の鋳物師の子孫が鋳物業を営む権利をずっと持ち続けた。この権利を持ち続けた陰には、江戸時代の経済の仕組みと強い関連があった。

今、政府は景気回復のために、国民にお金を使ってもらうように努力を払っている。ところが、江戸時代は贅沢は絶対の悪だった。さかのぼると、戦国時代は戦争に次ぐ戦争で、戦争のない世の中を作って欲しいというのが国民的要望だった。したがって、戦争のない世の中を作るためには、まず経済を発展させないようにしなければならない。今と全く反対である。そのためには、貨幣を使わない経済社会を作ることが必要である。そこで、通貨をできるだけ抑制して、米を基準にした経済体制を作った。武士はみんな役人とし、身分もきちんと決めて、分相応に米を月給として与えた。また、向上心などは持たないことが大事だとされた。こうした経済政策の一環に高岡銅器があった。高岡銅器には11人の開祖の鋳物師がいたが、これ以上増やす必要はないとされた。業者を増やせば競争する。競争すれば経済が発達して戦争になる。それで、絶対に増やさないために、筋目（家柄）以外の者には後を継がせないようにした。しかし、鋳物師としては長男はともかく、二男三男や年老いた従業員の救済のために、何とか仕事を持たせなければならないということで大変悩んだ。そこで、小さな吹子（ふいご）など小規模な設備で、細々と作業をさせるようになった。それで作ったのが銅器であった。銅は鉄より低温で溶かすことができるので仕事は容易であった。その銅でまず何を作ったかというと仏具であった。初めは細々とやっていた仏具作りも、100年、200年と経つうちにけっこう大きな商売をするようになり、仏具以外に簪（かんざし）なども作るようになった。このようにして仏具師というものが生まれてきた。

3.仏具師の台頭

本来の鋳物師を筋目鋳物師といい、それ以外の者は筋目でない鋳物師、つまり、仏具師というようになった。

江戸時代をずっとみてくると、経済を発展させないようにしても、やはりどんどん発展してきた。例えば、田沼時代（1767～1786）には開放経済となり進展したが、結局は堕落してしまった。ようするに経済が発展することが悪いという制度なのだから、これを抑えなければならなかった。それで、田沼の後に松平定信がでてきて勤倹貯蓄を打ち出すとともに、何回も改革をやるわけです。今は経済改革ということで、逆に国民に物を買わせようとして景気の回復をはかっている。昔の改革といったら勤倹貯蓄・質素倹約を打ち出し、無駄な物を買わないようにと呼びかけ、贅沢は敵だとした。

講演会風景

高岡のお触れを調べると、宝暦5年（1755）に銀の簪を作るのを禁止している。このことは、関ヶ原の戦いが終わって150年余りしか経っていないのに、庶民禁制の銀簪をする者がいっぱいいたということである。法律ができるということは、相当ひどくなってきたのでできるのである。また天保13年（1842）には、贅沢な冠婚葬祭は禁止、高岡の山車にも新しい飾りをつけることは罷りならぬと、達しがあったが守られていない。やはり、人間は贅沢をしたい、いいものを食べたい、着たい、いい家に住みたいという欲望を抑えることはできない。これを抑えることができれば、封建経済はきっちりとできるのだが、これは不可能なことだった。

長い年月の間、仏具師が細々と作っていたのが庶民の欲望にこたえるようになって、次第に贅沢な物を作るようになった。そうすると、これらの物をみんなに買わせて儲けようとする商人が出てきた。いわゆる仏具屋（金物商）である。このように時代が推移してくると、筋目の鋳物師と仏具師の間にいざこざが生じてきた。有名なのは勝興寺の灯籠の事件というのがある。中島町に住む仏具屋甚右衛門という人が、文化7年（1810）に勝興寺の大きい台灯籠の注文を受け、製作したのがきっかけである。小さい仏具類はともかくとして、本来、大きな銅器製品は筋目の鋳物師でないと作ってはいけないとされていた。そこで、金屋の鋳物師が結束して、高岡奉行所へ訴え出た。奉行所は甚右衛門に、昔からのしきたりで作ってはいけないといって差し止めた。しかし、甚右衛門はそれを無視して灯籠の製作を続け、しかも次第に大型化するようになった。金屋の人たちも弱り果て、やはり我慢できないということで、文化12年（1815）にまた訴え出た。今度は奉行所として、どうしたらよいかわからないので、真継（まつぎ）家にその判断を仰いだ。真継家というのは全国の鋳物師を司（つかさど）っている朝廷の役人で、したがって、筋目の鋳物師を擁護する立場にある。ところが、灯籠の注文主の中に京都の宮家や大きな寺が入っており、真継家も公家ですから高貴の人には弱かった。当時は身分社会ですから、身分の高いところから言われると弱るわけです。結局、うやむやになってしまい、作った者の勝ちということになってしまった。それにしても、大きな灯籠をルツボ溶解でよく作ったものである。一体物でないから分割するにしても相当の大きさであって、甚右衛門という人は大変開発的、積極的な人物であったと思われる。

大日本物産図会「越中国鉄物細工之図」
明治初期　三代広重作（当館蔵）

4.銅器問屋の始まり

はっきり判決が出たわけではないが、仏具師が認められた形になってしまい、町奉行も弱ってしまった。無理が通れば道理が引っ込むというような具合で、とうとう奉行所は文政2年（1819）になって、仏具屋甚右衛門に古銅等地金問屋として営業を認めてしまった。同時に、木舟町に住む小竹屋半兵衛に銅器販売の問屋の営業を認めた。これが、高岡の公認銅器問屋の始まりである。そして、販売額の1％を税金として納めることによって営業を認めた。商人の半兵衛は甚右衛門の仕事を支援し、当時の先進地京都の優れた仏具製品などを持ち帰って参考に供するなど、各地に高岡銅器を広めた。

高岡銅器として産地を形成したのは、開町から百数十年後の宝暦・明和の頃とみられている。しかしそれまでに、仏具師・彫金師・鋳物師など、金物の町、鋳物の町としての基礎は十分培われていた。この頃は、戦国時代から徳川幕府江戸時代へと移行して以来、最も泰平の世を謳歌したゆとりの時代に入っていた。それと銅器製品需要の伸びが合致してきたことも、高岡銅器発展の要因とみられる。

5.ペリー来航から居留地貿易へ

19世紀の中頃に、いわゆる幕末の動乱が起こってきた。その動乱の始まりは、嘉永6年（1853）にアメリカのペリーが軍艦4隻を率いて浦賀の沖に現れ、通商を迫ったことからである。これがもう上や下への大騒ぎとなった。日本は、200年余り非武装中立国だった。しかし中立といっても、努力して中立していたのでなく、海が広くて誰も来なかったから中立しとっただけのことであった。ペリーが来たからといって、あわてて鉄砲を持ち出したりしても、織田信長の時代と変わりなく、ほとんど200年前の鉄砲で、新しい元込銃（もとこめじゅう）を持った最新式の兵器と対抗できるわけがない。とにかく一戦も交えないで降伏した。

したがって、貿易はアメリカ側のペースで行われた。日本の国が侵略されないためには、これしかなかったと

いえる。そして、今の横浜に居留地を決め、外国人はそこに住まいしてもよいという、日本の法律が及ばない、いわゆる租界地を創設して居留地貿易を始めた。ただ、日本中どこででも貿易してもよいということだけは免れることができた。居留地で行われる貿易は、関税がなく、むこうの好きな条件で商売しなければならなかった。したがって、居留地へいって商売する者は、どんな目に合うかわからないのでなかなか行かなかった。そこで、幕府は各藩に店を出すように命じたが、やはり尻込みし行こうとしなかった。ところが、高岡銅器の問屋だけは違うのである。第9代角羽勘左衛門などは、井伊直弼が殺された万延元年（1860）に、もう横浜へ行って商売を始めていた。大変な度胸というか、こういう人たちがこれらの高岡銅器をつくり出していった。高岡の銅器商人は、既に北は松前から西は関西・中国、南は九州まで、東は関東・東海まで進出していたので、横浜居留地貿易は、将来性に満ちた新開地に見えた。幕末の居留地貿易は、高岡銅器商人の見込みどおり順調に伸び、かつ連年出超であった。輸出品の中で、工芸品は米・生糸・茶についで大きな割合を占めていた。角羽勘左衛門はその後、明治2年（1869）に藩と協同して横浜に銅器売捌所を設置、明治4年（1871）の廃藩まで経営していた。

明治に入ると、攘夷論者の政府が一転「開国」にころっと変わった。当時は誰がやったって攘夷でやっていけるわけがないのであって、どうしても、開国して外国に物を売らなければならなかった。そうすると、何が売れるかというと、日本は売る物がなかった。結局、一番たくさん売ったのは米で、次にお茶であった。あとは何かというと、江戸時代に発達した工芸品しかなかった。その中に銅器があった。

横浜弁天通りの角羽商店　明治42年
（「The Japan Tour Company」より　横浜開港資料館蔵）

6.万国博覧会での活躍

平和が200年余りも続いたので、工芸品に立派な美しいものが作られていた。例えば、弾がろくに出ない鉄砲でもきれいな蒔絵がしてあって、飾って置いたら大変立派なものであった。そこで、それらをどういう機会に売ったらよいかとなると、それは万国博覧会であった。この万国博には世界中の関心のある人が集まってくるので、万国博でがんばろうとした。そして、明治6年（1873）のウィーン万博に、政府として初めて公式参加することにした。それで、最初は政府が指導しないと、誰も知識がなく動けないので、政府がそれぞれの産地に注文した。その時、金工品の製作を金沢と高岡の双方へ注文して競作させた。これは、廃藩置県の結果、非常な苦境に陥った地方の産業を救済する意図もあって、各県に命じて特産物を製作させて買い上げたもので、明治新政府の殖産興業政策の走りであった。金沢に注文されたことについては、もともと藩の御細工人として有名な人がたくさんいたから当然だった。一方、高岡にも注文があったのは、横山弥左衛門という名工がいたからと考えられる。競作は高岡側の勝利に終わった。これは、金沢側が平象嵌を主体としたものは技術的には高いが、比較的小ぶりで、上品かつ地味な作品を作ったのに対し、高岡側は得意の鋳造技術を駆使した大型品を製作、象嵌よりも町彫り風の彫刻を主体に、華やかさで勝負したのが効を奏した。やはり仏具師の高度な技術の影響があったと考えられる。

ウィーン万博では横山弥左衛門の製品、特に「大江山入図花瓶」が大好評を博し、進歩賞牌を受けた。同時に、金森宗七や高岡鋳造社の製品も有功賞を獲得した。これを皮切りに、その後の海外万国博や内国勧業博等に積極的に出品し、多数の賞を獲得して高岡銅器の名声を内外にとどろかせた。このようにして、高岡銅器が世界的に知られていくようになり、欧米への輸出も伸びてきた。高岡銅器の輸出を可能にした要因の一つには、経済性は高いが技術水準の低かった高岡の町人金工に、経済性を度外視して最高の技術を完成した加賀の武家金工を導入したことであった。それは廃藩置県で、加賀藩御細工人の職人が失職したことによって可能となったもので、高岡銅器にとっては大きな技術革新であった。その立役者は金森宗七である。宗七は加賀藩や富山藩の御細工人を高岡に招き、高岡金工の技術革新に努めると同時に、金沢にも進出して彦三町に「宗金堂」を開設し、加賀金工の維持発展にも努めた。

当時の生産方式は、一人の親方のもとで初めから終わりまで作るといった、工房制による一品制作で精巧を極め、現在の価格にして一点数百万円もするような高価な作品が主流であった。とにかく、欧米人は東洋的な物に対して非常に憧れがあったので、どんどん輸出され工房制の生産方式が発達した。

7.高岡銅器と林忠正

明治初期の高岡銅器の生産額は年々伸びてきたが、明治15年あたりから下降線をたどった。これは、世界的な

ウィーン万国博覧会進歩賞 證状　明治6年
金森宗七　受賞（当館蔵）

ウィーン万国博覧会 有功賞牌　明治6年
金森宗七　受賞（当館蔵）

不況の到来と政府の緊縮財政政策によるものであったが、新しい輸出先の開拓を試みた結果、一時好転した。しかし、やがて輸出にも不況の影響があらわれてきた。高岡銅器の主匠の一人、白崎善平はこの傾向を憂えて、明治19年パリに在住している林忠正に手紙を送り、対策の教示を乞うた。林忠正は、これに対し「高岡銅器ニ答フル書」を書き送った。送られてきた長文の手紙の要点は次のようである。

- 工芸品の売れゆき不振は、世界的な不況のためで高岡だけのことではない。
- 西洋人が珍しがって何でも買った横浜貿易の時代はとっくに終わっているのに、日本の銅器業界はまだ目的や用途を考慮せずに、作れば売れるという考え方にとらわれている。
- 買手の立場を考えず、ただ立派な物を作れば売れると考え、漫然と独りよがりの作品を作る傾向がある。また値段も高すぎる。
- 欧米ではどのような所で、どのように使われているかを研究し、西洋人の生活空間の中で、その生活を豊かにする機能と形に着目することが大切である。

林忠正は、嘉永6年（1851）1月、高岡一番町の蘭医長崎言定の二男として生まれ、明治3年（1870）富山藩大参事林太仲の養子となった。そして明治11年（1878）東京大学を中退し、パリ万国博覧会の通訳として渡仏した。パリ万博終了後、政府の肝入れでつくった起立工商会社パリ支店に入社、後に独立してパリに日本美術店を開き、美術工芸品の貿易商として大活躍した。画家のモネ、ドガをはじめ、文学者のゴンクールやゴンスらとも深く交友し、日本人画商として浮世絵の紹介に努めるなど、東西文化の交流に大きな足跡を残した。

しかし、政府が大金を投じ、非常な意気込みで臨んだにもかかわらず、明治26年（1893）のシカゴ万博では思ったほどの成果をあげなかった。これは、林忠正の指摘のように、博覧会に目先の実利を期待する考え方は時代遅れになってきたということである。伝統的な工芸産業にも、近代化を迫る時代の節目が感じられ、高岡銅器の工房制の行き方では適さなくなってきたといえる。

8.工芸学校の創立（技術革新）

高岡銅器産業にとって、明治20年代の後半は大きな転機であった。変わり身の早い銅器商人はまだしも、多数の職人を雇って工場生産をしていた工房制の会社は、変化に対応できず、ほとんど全部がこの時期に廃業している。それがちょうど、高岡に工芸学校ができてくる時期と同じなのである。明治27年10月22日、全国で第三番目の実業高校として、富山県工芸学校が誕生した。工業学校といわず、特に工芸学校と称したのは全国的に特異なことである。それは、高岡における銅器・漆器という伝統工芸の指導改善を第一の目標としたからである。したがって、建学の精神はこれまでの以心伝心的徒弟制度を改善し、近代的な技術を伝統的なものに生かし、高岡の工芸を更に発展させようとするものであった。

初代校長に任ぜられたのが佐賀県出身の納富介次郎で、幼い頃から学を好み書画詩歌にも長け、長じては維新の志士江藤新平・後藤象二郎・高杉晋作らと交わり、維新の運動を推進した人である。明治6年にはウィーン万国博の審査官を拝命し、会期終了後、政府派遣の伝習生の一人として、約一年間ヨーロッパ各地の工芸を研究し、多くの技術を修得して帰朝した。帰国後、全国の工芸家を東京に集めて講習会を開き、産業の近代化を図った。工芸学校をつくるということは、新しい物を作るということだった。銅器・漆器の技術改良についても多大な力を注ぎ、高岡物産振興の恩人として高く賞賛された。

そして、明治28年頃には高岡銅器業界に黒鉛製の「るつぼ」が普及し、それまでの名古屋瓶などに代わって登場したので、溶銅作業の能率が非常に向上した。また、新しい着色技術の導入や電動送風機の設置など、いわゆる技術革新の時代を迎えた。

羅漢文様大飾皿　明治中期～後期
塩崎利平製
（高岡市美術館蔵）

羅漢文様大飾皿下図

9.問屋制工業体制の成立

今まで一つの工場内で、一人が一品を一貫生産するかまたは同じ品物を全員で共同製作するかといった工房制の生産体制であった。しかし、技術革新の進展は分業制を生み出し、大量生産が可能になった。それが昭和11年頃までどんどん発達し、全国一の生産地になった。この分業の主役が問屋で、家内工業体制あるいは問屋制工業体制ともいい、職人が製品の製造工程の一部を、自分の作業場で生産し、販売業である問屋が全体を指導し統括する産業体制をとっていた。したがって、色付け・研磨や仕上げだけでも商売が成り立つようになった。また、昔は火鉢が主体だったから、火鉢の台を作るだけでも商売になっていた。このような機構をもっていたのは高岡だけで、大阪・京都や金沢にはなかった。昭和10年頃には、高岡が大都市を追い越して全国一の生産額をあげるようになった。

江戸時代からの高岡の問屋の一つの特色として、県内で消費する高岡銅器は僅か生産額の4％程で、あとはみんな国内外へ売り出していたことがあげられる。したがって、資本と労働力は高岡にあって、売り先は国内外に向けられている。これを地場産業という。高岡銅器は典型的な地場産業を、問屋を中心とした家内工業体制でつくってきたといえる。ただ、高岡の場合は零細企業がたくさん集まって一つの産地を形成している。これは大変珍しいことであった。利点としては、景気の状況に対応しやすいという柔軟性がある。景気が悪くなればどこかへ勤めに行き、良くなればまた小さい資本で商売を再開するという形で変動に適応できた。

10.戦後の高岡銅器

第二次世界大戦の主要兵器は航空機であったから、飛行機製造用アルミニウムの蓄積は終戦時でも相当大きかった。地元所在のものはもとより、全国各地からインゴットやスクラップされた原料アルミニウムが、鋳造設備と技術のある高岡へ続々と運び込まれた。そして、銅器業界にナベ・カマ景気が到来した。その時は問屋などはいらなかった。都会の問屋が直接来て品物の出来上がるのを待っていて、まだ完全に仕上がっていなくても、早々に買い上げていくくらいだった。こういう時代が戦後2～3年続き、昭和23年頃になると、次第にナベ・カマ景気も下火になってきた。昭和25年の朝鮮動乱では、他の産業は非常に好景気だったが、高岡銅器は銅そのものの値段は上がり、景気はよくなかった。どうも銅器は戦争に弱かった。けれども、昭和30年頃から世界的な復興ブームが起こり、昭和35～36年には高岡銅器もだいたい戦前の水準に回復し、この間に問屋 も復活してきた。戦後の問屋は戦前ほど職人の丸がかえをしなかった。製造者も作れば売れる時代があってかなり力をつけており、問屋に全面依存する必要はなくなっていた。昭和30年代の後半から40年代にかけて高度成長時代を迎えた高岡銅器もたいへん伸びてきた。ところが、昭和48年のドルショック、53年の石油ショックによって銅器の生産も頭打ちとなり、さらに、バブル景気がはじけた近年は低成長時代を迎えている。

伝統産業も、時代の変革の波の中で生きていくためには、時代に適合する製品を生みだすことが重要である。そのためには、伝統技術部門の充実を図ると同時に、ハイテク導入による省力化と新設備・新技術の開発に努めていかねばならない。

（高岡市文化財審議会　会長）

この講座は、企画展「高岡銅器産業を築いた商人たち」に関連して開催（平10.5.16.土）

講演会要旨収録　文責　学芸員補　村本一雄

収　蔵　資　料　紹　介

◆前田利長判物（はんもつ）

この資料は加賀藩2代藩主利長が、高岡城入城より12年前の慶長2年（1597）12月16日付で、守山・富山両町の3名を総代とした鍛冶屋たちに宛てて出した文書である。内容は「越中全体の鍛冶の役儀（税）は滞りなく上納すべし」と、厳しく達した命令書である。この文書で注目すべき点は、守山と富山両町に同時に宛てていることである。このような形式は珍しいが、この日付けは利長が守山城から富山城に移って僅か2ヶ月後のものであり、越中の旧新の中心地が未だ完全に移行しておらず、政治的配慮を伺わせ、非常に興味深い。

また、利長の花押（かおう）（サイン）は3種類あるが、これは慶長6年まで使用していた、最も若い時（当時35歳）の花押である。

形態は横に長い巻物になっているが、元は折紙（おりがみ）であったものを明治以降に分断し、つないだものと思われる。

前田利長判物　部分　　縦 17.0cm　横 97.0cm

◆渾天儀（こんてんぎ）

「渾天儀」とは本来は天体の位置を測定する器具であるが、江戸後期には太陽と月の動きを説明する器具として利用されていた。暦学を志す人には便利な器具で、この原理を発展させたものが、現在のプラネタリュームである。

全国には21ヶ所に残っており、富山県内では城端町立中央公民館蔵品と当館蔵品の僅か2台しか残っていない。城端のものは、文化9年（1812）に小原治五右衛門（一白）が製作したことは分かっているが、当館蔵品は彫刻師と塗師しか分かっていない。しかし、当館蔵品は中心に配された地球儀の地図の書き具合や、磁石が使用されていることなどから、その製作年代は、城端のものより少し下った時代に製作されたものと考えられる。

高さ　54.5cm
径　61.0cm
銘　「髹工　高陵　中邨尚潤」
「高陵住　黒川成清造之」

◆新収蔵品紹介　　4月1日～平成11年1月31日現在

		寄　贈　者
明治期輸出銅器「虎置物」	（産業資料）	金子紀昭氏
子供用絵本（20冊）	（民俗資料）	古谷昭史氏
売薬版木（5点）	（民俗資料）	古谷昭史氏
銅器問屋角羽家資料一式（歴史・民俗・産業資料）		

郷土の歴史資料などの情報を求めています。

歴史資料や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解する上での貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書・絵画・その他資料などの収集を行い、企画展に生かし皆様に見ていただきたいと思っております。情報がありましたら、是非ご提供をお願いいたします。

◆博物館刊行図録　　（税込）

年代	図　録　名	金額
1998	企画展「高岡銅器産業を築いた商人たち」	700
	企画展「高岡の祭礼と母衣武者行列」	300
	特別展「台所用具の移り変わり」	500
1997	企画展「近世の染・織の美」	1,000
	企画展「戦時下の暮らし」	300
1996	特別展「古九谷と屏風絵」	1,500
	企画展「加越老舗百年」	500
	企画展「音響文化の移り変わり」	300
1995	企画展「絵図にみる観光名所」	500
	企画展「おもちゃの今・昔」	500
	企画展　マイ・コレクション「家庭電化の移り変わり」	300
1991	研究展示　郷土歴史シリーズ「飛見家文書資料と丈繁氏の偉業」	500
1989	中国遼寧省文物展	1,000

平成11年度　展示紹介

◆常設展「郷土の暮らしと文化」

4月1日（木）～平成12年3月31日（金）

高岡市は、近世期の開町以来、銅器・漆器をはじめとする伝統産業を生み出し、今日まで商工都市として発展してきました。特に明治期における高岡商家の商業活動は、全国的にみても特筆すべきものがあります。

このような郷土の特性を「高岡の歴史」「高岡の伝統産業」の2つのテーマにより構成し、当館収蔵の歴史・民俗・産業資料約300点を、常に開かれた市民学習の場として展示公開いたします。

◆企画展「ふるさとの偉人」

6月29日（火）～8月31日（火）

郷土高岡の今日の繁栄は、当地に生まれて活躍した勤勉実直で進取の気性に富んだ人々によってもたらされました。私達は、この先人から受け継いだ独自の素晴らしい歴史や文化を持つこの郷土を更に発展させ、次世代に引き継いでいかなければなりません。

科学や医業・学問・教育など一つの道に精進し活躍、後世まで語り継がれる偉業をなし遂げた先人達の業績をゆかりの品・書簡・古文書・写真などの展示により紹介します。

◆特別展「地獄と極楽」
ー仏教図像にみる信仰のかたちー

10月9日（土）～12月5日（日）

仏教伝来とともに伝わったと考えられる地獄思想は、平安・鎌倉時代の人々に来世への不安な気持ちを抱かせ、そこからの救済として仏の住む極楽浄土へのあこがれと浄土思想が広まりました。

高齢者との同居が減少し、信仰の意識が希薄になりがちな今日、県内の名刹等が所蔵する「地獄図」・「極楽図」・「曼荼羅絵」・「来迎阿弥陀図」・「立山曼荼羅」などの展示を通して、仏画や仏像に見られる日本人の信仰のかたちを紹介します。

観経浄土変相図　部分
（高岡・極楽寺蔵）

平成11年2月1日　高岡市立博物館編集　〒933-0044　富山県高岡市古城1-5　TEL0766-20-1572　FAX0766-20-1570